

査読研究ノート

『藪の中』と『偷盗』の計量テキスト分析

A Quantitative Textual Analysis of “In a Grove” and “Chuto”

青木優*・青木ゆかり**

AOKI Masaru* and AOKI Yukari**

要旨

本研究では、計量テキスト分析を用いて、芥川龍之介の作品の中で『今昔物語集』を原作とする王朝物と呼ばれる作品中の2作品『藪の中』と『偷盗』の関係を明らかにすることを第一の研究目的とし、それに関連して事件の真相と主題に関して大岡説を支持する形で、同2作品の主要3人の関係を比較することを第二の研究目的としている。頻出語に関する対応分析と共起ネットワーク分析の結果、『藪の中』は、『偷盗』のスキーマによる証言の自己劇化、人物設定、男女の三角関係のもつれがスピノフ(本研究では、「スピノフ」を作品の構成要素の継承という意味で用いている。)した作品であることが分かった。また、分析結果に基づいて両作品の主要3人の関係を比較したところ、多く的一致が見られ、スピノフを裏付ける証拠となった。

キーワード：計量テキスト分析、KH Coder、芥川龍之介、藪の中、偷盗

- I. 序論
- II. 計量テキスト分析
 1. テキストデータの準備
 2. 前処理
 3. 頻出語・対応分析
 4. 抽出語・共起ネットワーク分析
- III. 結果
 1. 頻出語・対応分析による『藪の中』と『偷盗』の関係の分析
 2. 頻出語・対応分析による『藪の中』主要3人の関係の分析
 3. 頻出語・共起ネットワーク分析による『藪の中』主要3人の関係の分析
 4. 頻出語・共起ネットワーク分析による『偷盗』主要3人の関係の分析
- IV. 考察
 1. スキーマによる証言の自己劇化
 2. 『偷盗』と『藪の中』に於ける主要3人の比較
 3. 『羅生門』から『偷盗』へ、『偷盗』から『藪の中』へ
- V. 結語

(2023年9月15日受領、10月6日受理)

* 静岡産業大学スポーツ科学部教授

** 元清泉女子大学文学部助手

I. 序論

芥川龍之介の作品『藪の中』は、藪の中で発見された男の死体をめぐる7人の証言『検非違使に問われたる木樵りの物語』『検非違使に問われたる旅法師の物語』『検非違使に問われたる放免の物語』『検非違使に問われたる媼の物語』『多襄丸の白状』『清水寺に来れる女の懺悔』『巫女の口を借りたる死霊の物語』から構成される『今昔物語集』を原作とする王朝物と呼ばれる作品の一つである。王朝物の中には『藪の中』以外にも盗人達を描いた作品『偷盗』があり、この2作品には共通の登場人物である多襄丸という盗人が登場している。

『藪の中』の先行研究に関しては、主要登場人物の3人それぞれが、自分が犯人であると証言していることから、事件の真相に関する研究や主題に関する研究が多く、これらの諸説に関しては福田(1978年)の論文に詳しくまとめられている。それによると、事件の真相に関しては1970年代の中村と福田による論争が有名である。中村(1970年)は、それぞれの証言の食い違いは作品の構成上の問題と捉えて、誰が犯人なのかを突き止められないと主張している。一方、福田(1970年)は、それぞれの証言は自分を主役にする為の「自己劇化」とであると主張している。その後、柄谷(1972年)は、その「自己劇化」が無意識のものであると主張している。またその論争とは別に、大岡が主人公である武弘の証言の信憑性を説き、武弘の自殺であると主張している。また大岡(1970年)は主題に関しても、1人の女とそれを奪い合う2人の男の三角関係という男女間のもつれの葛藤であると主張している。

これ以外にも『藪の中』は、殺人事件の真相究明というテーマで様々な分野で取り上げられている。例えば、法曹界では本作品を教

材として活用¹⁾し、データサイエンスの分野では、蔡ら(2020年)によって人工知能を活用した真犯人探しの研究も行われている。また、「真相は藪の中」(本来は「真相は闇の中」という言葉は、この『藪の中』が語源と言われている。

そこで本研究では、『藪の中』と『偷盗』が同じ王朝物である事、女1人、男2人の三角関係を描いている事、盗人の多襄丸が登場する事から、両作品には何らかの関係があると考え、計量テキスト分析の結果を基に同2作品の関係を明らかにすることを第一の研究目的とする。また我々は、事件の真相と主題に関して大岡説を支持する形で、同2作品に於ける主要3人の関係を比較することを第二の研究目的とする。

II. 計量テキスト分析

本研究では、計量テキスト分析フリーソフトウェアKH Coderを用いて、『藪の中』と『偷盗』のテキストデータについて、頻出語・共起ネットワーク分析と頻出語・対応分析を行う。そこで本章では、これら分析の詳細について説明する。

1. テキストデータの準備

『藪の中』と『偷盗』のテキストデータは「青空文庫」からダウンロードしたデータ^{2,3)}を使用している。ダウンロードしたテキストデータについては、データクレンジングを行うことでルビや作品本文以外の情報を除去し、作品本文のみのデータにしている。

実際に計量テキスト分析を行う場合には、分析方法に応じてテキストデータを準備する必要がある。本研究で準備したテキストデータは、以下の7個である。

・『藪の中』全文と『偷盗』各章(第1章から第9章まで)の結合データ(1個)

¹⁾ 石塚, 2020年.

²⁾ 芥川龍之介『藪の中』, 「青空文庫」<https://www.aozora.gr.jp/cards/000879/card179.html>(2023年9月7日アクセス)

³⁾ 芥川龍之介『偷盗』, 「青空文庫」<https://www.aozora.gr.jp/cards/000879/card31.html>(2023年9月7日アクセス)

- ・『藪の中』各証言（7人分）と『偷盗』各章の結合データ（1個）
- ・『藪の中』主要3人の証言の結合データ（1個）
- ・『藪の中』全文（1個）
- ・『藪の中』主要3人（多襄丸、真砂、武弘）の各証言（3個）

2. 前処理

分析に入る前にKH Coderで頻出語リストを作成し、語の切り出しに問題があるかどうかを調べ、問題がある場合には「語の取捨選択」で「強制抽出する語の指定」と「使用しない語の指定」を行う。図1に『藪の中』と『偷盗』の結合データの分析に於ける強制抽出する語を示し、図2には使用しない語を示す。また、図3には『藪の中』のみの分析に於ける強制抽出する語を示す。因みに、『藪の中』のみの分析に於ける使用しない語の指定は、事前の調査の結果、不要である。

太郎、次郎、沙金、猪熊、おばば、爺、阿濃、疫病、平六、餓死、朱雀綾小路、葉柳、藁草履、藤判官、帷子姿、築土、土器、女車、女夜叉、狩犬、びょうびょう、たかうすびょう、まっしぐら、わたし、おれ、わし、あなた、お前、おぬし、己、おのれ、真砂、多襄丸、武弘、放免、木樵り、旅法師、媼、一しょ、杉、仕遂げる、仕兼ねる、殺

図1. 『藪の中』と『偷盗』の結合データの分析に於ける強制抽出する語

う、じゃ

図2. 『藪の中』と『偷盗』の結合データの分析に於ける使用しない語

真砂、多襄丸、武弘、放免、木樵り、旅法師、媼、わたし、おれ、あなた、一しょ、杉、仕遂げる、仕兼ねる、殺

図3. 『藪の中』のみの分析に於ける強制抽出する語

また、表記揺れなどによる表記の統一については、表1に『藪の中』と『偷盗』の結合データの分析に於ける表記統一を示す。また『藪の中』のみの分析では表記統一は不要である。

表1. 『藪の中』と『偷盗』の結合データの分析に於ける表記統一

表記統一後	表記統一前
太郎	太郎、兄、下人
次郎	次郎、弟
おばば	ばば、おばば、老婆、おばあさん
爺	爺、お爺、老人、おじいさん
門	羅生門、門
死骸	死骸、死人
お前	お前、お前さん
言う	言う、云う

3. 頻出語・対応分析

本研究では、結合データについて頻出語・対応分析を行う。「分析に使用するデータ表」は「抽出語×文書（見出し）」とし、結合した各々の文書（見出し）の関連や、それらの特徴語が分かるようにしている。その他のオプションについてはデフォルトのままである。

4. 抽出語・共起ネットワーク分析

『藪の中』全文、『藪の中』主要3人の各証言、『藪の中』主要3人の証言の結合データについて頻出語・共起ネットワーク分析を行い、頻出語・共起ネットワーク・最小スパニングツリーを求める。集計単位は、デフォルトの「段落」ではなく「文」としている。その理由は、作品が短くて段落が少なく、段落を集計単位とすることが難しい為である。また抽出語の選択についてはデフォルトのまま

とする。共起関係の種類に関しては、『藪の中』全文、『藪の中』主要3人の各証言は「語一語」であり、『藪の中』主要3人の証言の結合データは「語一外部変数・見出し」とする。

Ⅲ. 結果

1. 頻出語・対応分析による『藪の中』と『偷盗』の関係の分析

『藪の中』と『偷盗』の関係进行分析する為、最初に『藪の中』全文と『偷盗』各章の頻出語・対応分析を行った(図4)。その結果、『藪の中』全文は、『偷盗』第3章、第9章との間に関連が見られた。

次に『藪の中』各証言と『偷盗』各章の頻出語・対応分析を行った(図5)。その結果、『藪の中』武弘以外の証言は『偷盗』第9章との関連が見られた。特徴語としては、「わたし」「馬」「死骸」が挙げられる。また、『藪の中』武弘の証言と『偷盗』第3章には強い関連が見られた。特徴語としては、「おれ」「妻」「盗人」が挙げられる。

2. 頻出語・対応分析による『藪の中』主要3人の関係の分析

『藪の中』で武弘の死の真相に深く関わっているのは、死亡した武弘を含めた主要3人の多襄丸、真砂、武弘である。他の木樵り、旅法師、放免、媼の4人の証言は、証言内容も少なく、事件の真相に迫るものではない。また、図5の『藪の中』武弘の証言と『偷盗』第3章に特徴的な語としては「おれ」「妻」「盗人」が挙げられることから、『藪の中』主要3人の証言に焦点を絞り、頻出語・対応分析を行った(図6)。本来であれば、両作品それぞれの主要3人、つまり計6人のテキストデータを結合して対応分析を行いたいところではあるが、『偷盗』では主要3人について各々のテキストデータを切り分けられない為、『藪の中』主要3人のみの対応分析を行うことにした。分析の結果、3人の証言にはそれぞれ特徴があり、関連が弱いことが分かる。

3. 頻出語・共起ネットワーク分析による『藪の中』主要3人の関係の分析

図7に『藪の中』全文の頻出語・共起ネットワーク・最小スパニングツリーを示す。主要3人の関係を示すサブグラフとしては、サブグラフ③、④、⑤が挙げられる。

サブグラフ③の「わたし」に関しては、媼と武弘を除く登場人物の木樵り、旅法師、放免、真砂、多襄丸が使用している。サブグラフ④の「男」に関しては、木樵り、旅法師、媼、多襄丸が「武弘」を示す語として使用しているが、真砂と武弘は「多襄丸」を示す語として使用している。また、放免は「武弘」と「多襄丸」のいずれに対しても使用している。「女」に関しては、旅法師、媼、多襄丸は「真砂」を示しているが、放免は今年の秋に「女」好きの多襄丸が殺したと疑う月毛に乗っていた「女」と「女」の童も含んでいる。サブグラフ⑤の「おれ(武弘)」 「妻(真砂)」 「盗人(多襄丸)」は主要3人を示す語であるが、放免と媼は「盗人」以外にも「多襄丸」として語っている。

対応分析に於いては主要3人以外の登場人物である木樵り、旅法師、放免、媼の証言を除外し分析を行ったが、この全文の共起ネットワークにおいても証言する人によって「わたし」「男」「女」などが指している人物が異なり、主要3人だけの関係を考察するのは困難である。そこで、主要3人の関係を明らかにする為に、主要3人の各証言について共起ネットワーク分析を行うことにする。

『藪の中』と『偷盗』の計量テキスト分析

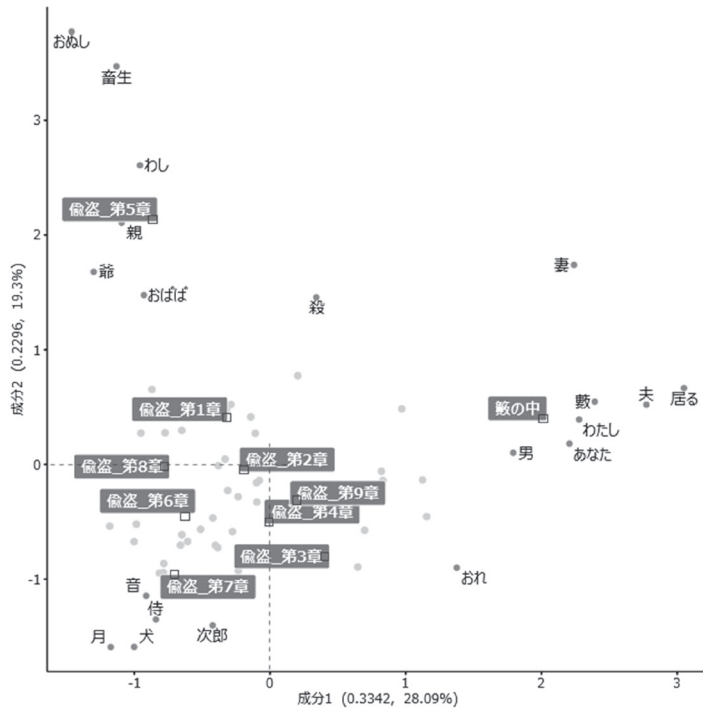


図4. 『藪の中』全文と『偷盗』各章の対応分析

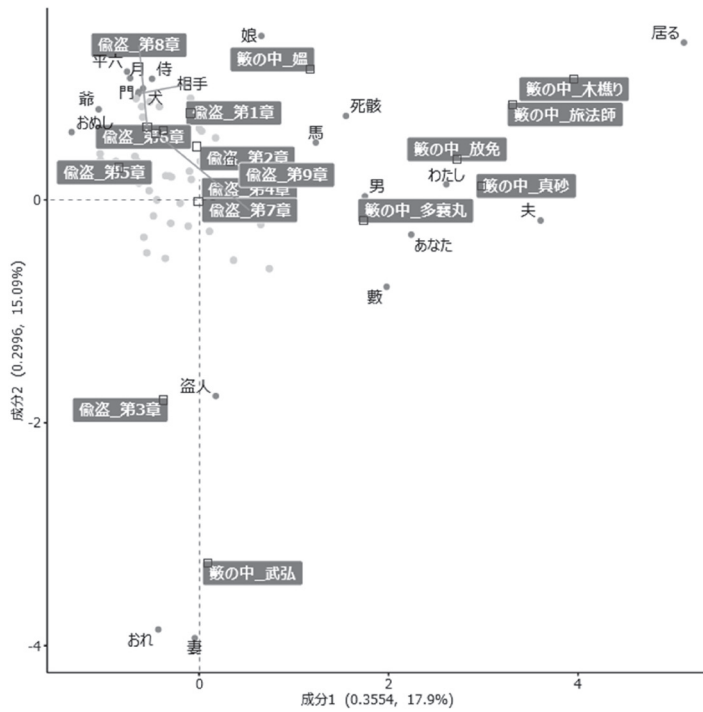


図5. 『藪の中』各証言と『偷盗』各章の対応分析

図8に多襄丸の証言の頻出語・共起ネットワーク・最小スパニングツリーを示す。この中で、サブグラフ④の「わたし(多襄丸)」-「女(真砂)」(0.27)⁴⁾と「わたし(多襄丸)」-「男(武弘)」(0.25)の共起関係が特徴的であり、それらの共起関係の強さは同程度であることが分かる。また、「男(武弘)」-「殺(0.35)」、「奪う」-「決心(0.40)の強い共起関係は、多襄丸が「男」を「殺」して「女」を「奪う」と「決心」したことが表れている。そして、サブグラフ⑧の「妻(真砂)」は、「この女(真砂)を妻にしたい」という多襄丸の言葉が表れたものである。最後に、多襄丸の証言では、「わたし(多襄丸)」-「男(武弘)」、「わたし(多襄丸)」-「女(真砂)」は共起するが、「男(武弘)」-「女(真砂)」は共起しないことが分かる。

図9に真砂の証言の頻出語・共起ネットワーク・最小スパニングツリーを示す。サブグラフ⑦の「わたし(真砂)」-「夫(武弘)」(0.33)の強い共起関係が特徴的である。サ

ブグラフ②の「色」-「冷たい」-「蔑む」(共に0.67)の強い共起関係は夫の眼の色を表している。最後に、真砂の証言では、「わたし(真砂)」-「夫(武弘)」は共起するが、「わたし(真砂)」-「男(多襄丸)」、「夫(武弘)」-「男(多襄丸)」は共起しないことが分かる。

図10に武弘の証言の頻出語・共起ネットワーク・最小スパニングツリーを示す。サブグラフ⑤の「妻(真砂)」-「盗人(多襄丸)」(0.39)の強い共起関係が特徴的である。真砂の「あの人(武弘)を殺して下さい。」の言葉は、サブグラフ⑥の「人」-「殺(0.43)に表れている。武弘の証言に於ける一人称「おれ」という頻出語は30回出現して最多であるが他の頻出語と共起しない為、この共起ネットワークには表れていない。最後に、武弘の証言では、「妻(真砂)」-「盗人(多襄丸)」は共起するが、「おれ(武弘)」-「妻(真砂)」、「おれ(武弘)」-「盗人(多襄丸)」は共起しないことが分かる。

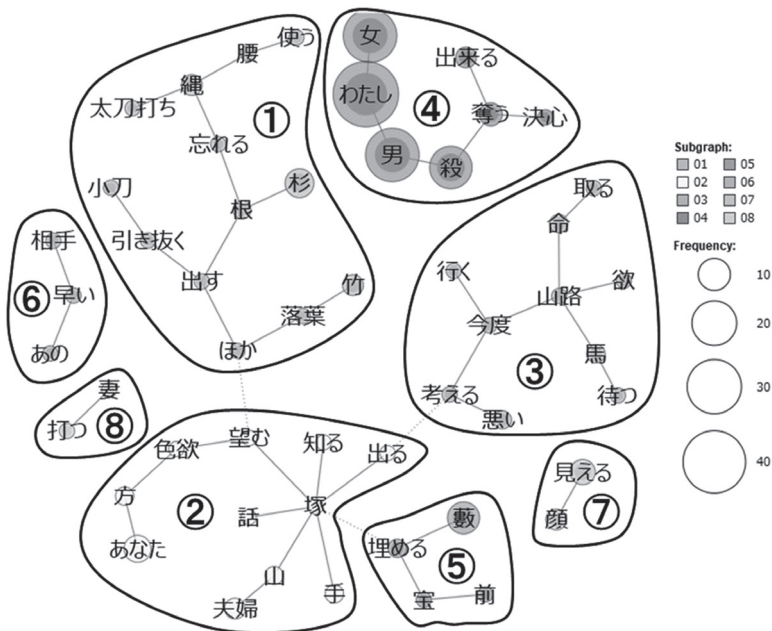


図8. 『藪の中』多襄丸の証言の頻出語・共起ネットワーク・最小スパニングツリー

⁴⁾ 括弧内の数値は Jaccard 係数を示す。

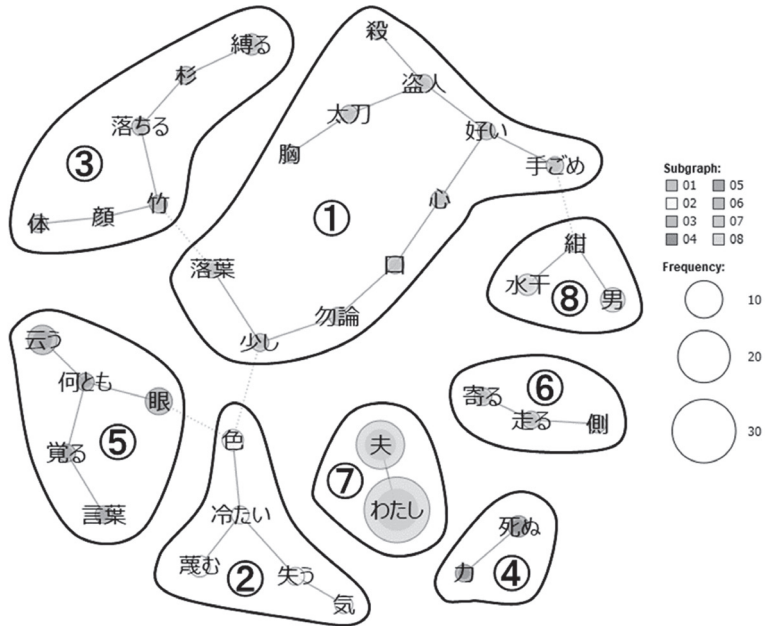


図9. 『藪の中』真砂の証言の頻出語・共起ネットワーク・最小スパニングツリー

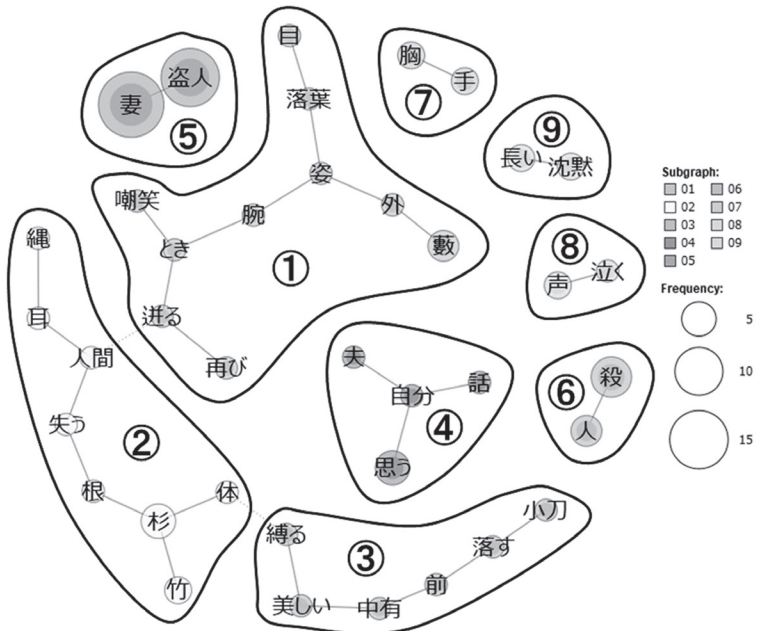


図10. 『藪の中』武弘の証言の頻出語・共起ネットワーク・最小スパニングツリー

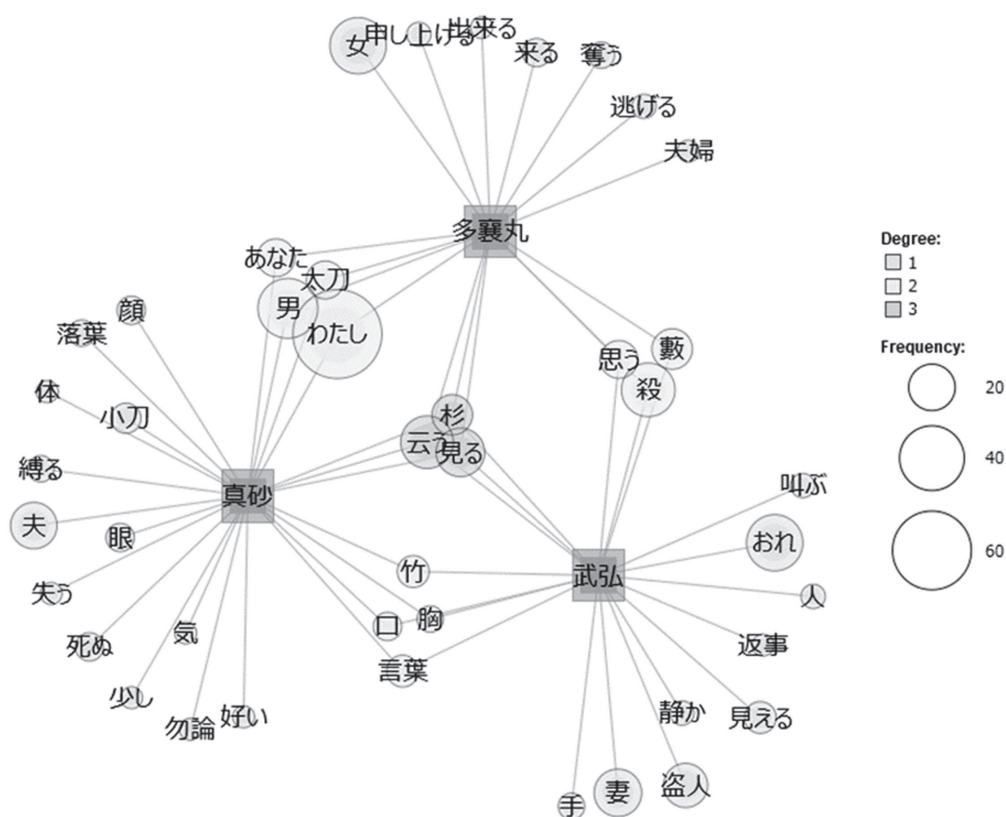


図 11. 『藪の中』主要 3 人の各証言と頻出語の共起ネットワーク

次に、図 11 に『藪の中』主要 3 人の各証言と頻出語の共起ネットワークを示す。主要 3 人の対応分析（図 6）では各証言と頻出語の位置関係から各証言の類似性と各証言に於ける特徴語を見出したが、ここでは各人物の証言に共通の共起語について分析する。

最初に、3 人に共通の共起語は「杉」「見る」「云う」であるが、これらから 3 人の関係について考察することはできない為、これ以上は言及しないことにする。

次に、多襄丸と真砂の証言に共通の共起語は、「わたし（多襄丸、真砂）」「あなた（検非違使、多襄丸）」「男（武弘、多襄丸）」「太刀」である。「わたし」に関してはお互いの一人称である。「あなた」については、真砂は武弘と多襄丸を指し、多襄丸は検非違使を指す。「男」については、多襄丸は武弘を指し、

真砂は多襄丸を指す。「太刀」に関しては両者の間に矛盾が見られ、多襄丸は自分が武弘を殺害した際の凶器であることを仄めかしているが、真砂はそうには証言しておらず、自分が小刀で武弘を刺したと証言している。

続いて、真砂と武弘の証言に共通の共起語は、「言葉」「口」「胸」「竹」である。特に「言葉」に関しては両者の間に矛盾が見られ、真砂は「殺せ」と夫が発した「言葉」を指し、武弘は「あの（武弘）を殺して下さい」と真砂が多襄丸に発した「言葉」を指す。

最後に、武弘と多襄丸の証言に共通の共起語は、「殺」「思う」「藪」である。「殺」については、多襄丸が武弘を「殺」す事を指し、武弘は真砂が言った「あの（武弘）を『殺』して下さい」を指している。

4. 頻出語・共起ネットワーク分析による『偷盗』主要3人の関係の分析

『藪の中』と『偷盗』の主要3人の関係を比較する為、ここでは『偷盗』の主要3人(太郎、次郎、沙金)の関係について分析する。最初に、太郎の一人語りの章である『偷盗』第3章の頻出語・共起ネットワーク・最小スパニングツリーを図12に示す。サブグラフ⑤の「おれ(太郎)」-「沙金」と「沙金」-「次郎」の共起関係から「おれ(太郎)」は「沙金」を介して「次郎」を考えている事が分かる。「沙金」-「奪う」に「沙金」を「奪」われる事への恐れが表れている。「人」-「殺

す」は、人殺しという悪事と太郎が次郎を脱獄させる為に放免の1人を切り殺した事を指す。

次に、次郎の一人語りと沙金と次郎の会話から構成される章である『偷盗』第4章の頻出語・共起ネットワーク・最小スパニングツリーを図13に示す。サブグラフ③で「自分(次郎)」-「太郎」、「自分(次郎)」-「沙金」は共起するが、「太郎」と「沙金」は共起していない。また、「わたし(沙金)」-「あなた(次郎)」の共起関係から、太郎の場合とは異なる2人の親密度が確認できる。

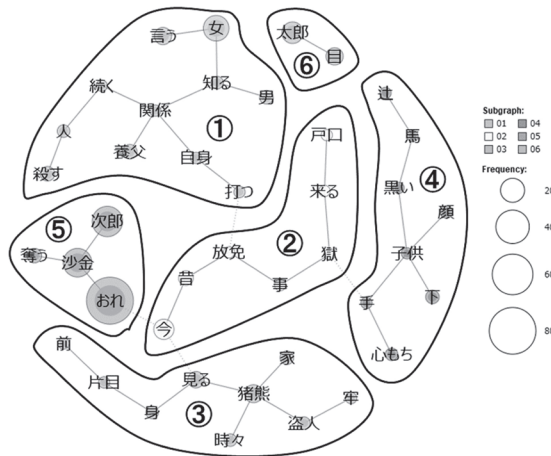


図12. 『偷盗』第3章の頻出語・共起ネットワーク・最小スパニングツリー

(出典) 青木優、青木ゆかり『『羅生門』と『偷盗』の計量テキスト分析』静岡産業大学論集『環境と経営』第29巻2号, 2023年, p. 10.

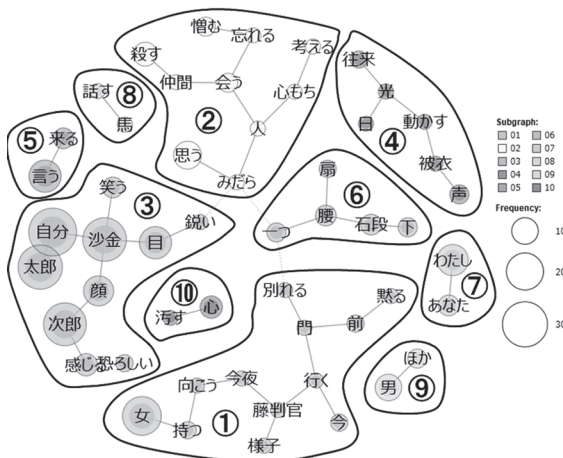


図13. 『偷盗』第4章の頻出語・共起ネットワーク・最小スパニングツリー

(出典) 青木優、青木ゆかり『『羅生門』と『偷盗』の計量テキスト分析』静岡産業大学論集『環境と経営』第29巻2号, 2023年, p. 11.

IV. 考察

1. スキーマによる証言の自己劇化

『藪の中』各証言と『偷盗』各章の頻出語・対応分析の結果(図5)から、『藪の中』の武弘以外の証言は『偷盗』第9章との関連が見られた。特徴語としては、「わたし」「馬」「死骸」が挙げられる。実は『偷盗』第9章も阿濃の証言の章であり、『藪の中』の証言と類似している。武弘の証言では武弘が一人称を「おれ」とし、媼の証言では媼が一人称を「姥」としており、それ以外の証言では「わたし」である。また、武弘の証言には「馬」「死骸」が表れない。このような理由から、『藪の中』の武弘以外の証言と『偷盗』第9章との間に関連が見られたと考えられる。以上から筆者らは、この証言形式が『偷盗』第9章から『藪の中』へスピノフ⁵⁾したものとする。

更に、図5に於いては『藪の中』武弘(主人公)の証言と『偷盗』第3章(主人公の太郎の語りの章)には強い関連が見られた。特徴語としては「おれ」「妻」「盗人」である。そこで筆者らは、主人公の人物設定もスピノフしているのではないかと考える。しかし、主人公の人物設定を考察する際は、他の主要人物2人も含めた主要3人について考察する必要がある。それには各証言の頻出語・共起ネットワーク分析が有用であるが、それは次節で考察することとし、本節では先ず『藪の中』主要3人の証言の頻出語・対応分析の結果(図6)について考察を行う。分析の結果、3人の証言にはそれぞれ特徴があり、強い関連は見られなかった。そこで筆者らはこれを証言に於ける「自己劇化」とであると考える。柄谷(1972年)は、「自己劇化」については「無意識」のものでなければならないと指摘していたが、認知心理学の分野では、人間が記憶している出来事を語る際の誤りや歪曲に関しては「スキーマ」の影響があるとしている。因みに「心理学用語集サイコタム」では、「ス

キーマ」を「人は外界からの情報を、スキーマと呼ばれる自分なりの枠組みの中で再構成して理解し、記憶していることがわかります。何かを思い出すにあたっては、再構成の影響を完全に排除することはできません。」⁶⁾と説明している。

序論では、この作品が法曹界において刑事事件の事実認定の教材として使用されていることを紹介したが、その教材の中では「これら3供述の信憑性を問うてはならず、その供述者がその立場において述べることを虚心に聞かなければならないことを学ぶためである。」⁷⁾と説いている。多襄丸は盗人の立場、真砂は妻の立場、武弘は夫の立場から述べた証言であり、それぞれの物語がある。そうであるならば、『藪の中』主要3人の証言の関連が弱いということは、各々がこの事件を自分の「スキーマ」の中で再構成・理解・記憶していることを意味しており、『藪の中』には人間の本質的な一面が良く表れていると言える。『偷盗』第9章の阿濃の証言には信憑性を欠くという山本(2022年)の記述もあるが、人間の証言がスキーマの影響を少なからず受けるならば、『藪の中』の主要3人の証言も『偷盗』第9章の阿濃の証言もスキーマによる自己劇化と捉えることができる。芥川は、この十人十色の証言を『偷盗』から『藪の中』へスピノフし、『偷盗』第9章では僅か1人の証言から構成されていた物語を、『藪の中』では複数の登場人物の証言で構成することにより、1つの物語の中にそれぞれの物語を描いたのである。

2. 『偷盗』と『藪の中』に於ける主要3人の比較

前節に於いて、対応分析の結果に基づき、『偷盗』から『藪の中』へ主人公の人物設定もスピノフしている可能性を述べ、それを確認する為には共起ネットワーク分析を用い

⁵⁾ 本研究では、「スピノフ」を作品の構成要素の継承という意味で用いている。

⁶⁾ 「心理学用語集サイコタム」<https://psychoterm.jp/> (2023年7月29日アクセス)

⁷⁾ 石塚,2020年,p33.

て主要3人の関係を分析する必要があることを述べた。そこで本節では、両作品の主要3人について立場が似ている者同士に共通の特徴を抽出し、同時に両作品の三角関係についても考察する。具体的には、『偷盗』の三角関係(太郎、次郎、沙金)と『藪の中』の三角関係(武弘、多襄丸、真砂)に共通する1人の女(心変わりする女)と2人の男(女を奪う男、女を奪われる男)の描かれ方を考察する。

(1) 女を奪う男—『藪の中』の多襄丸と『偷盗』の次郎の共通点—

(ア) 女と男を分けて考える。

図8のサブグラフ④に多襄丸、図13のサブグラフ③に次郎の共起関係が表れている。

(イ) 女に対して同じ貞操観念を持つ。

図13のサブグラフ⑩で、次郎が「沙金が『肌身』を『汚す』事は、同時に沙金が『心』を『汚す』事だ。」と考え、分析結果には表れていないが、武弘の証言の中で多襄丸が「一度でも『肌身』を『汚』したとなれば、夫との仲も折り合うまい。」と真砂に言う部分がある。

(ウ) 女の提案に即答しない。

図10のサブグラフ⑤に、真砂の夫殺しの依頼に対して『盗人』(多襄丸)はじつと『妻』(真砂)を見たまま、殺すとも殺さぬとも返事をしない。」と読み取れる。図13のサブグラフ①に、沙金の太郎殺しの提案を聞いた次郎が「黙」って沙金の「前」を歩く様子が示される。

(エ) 女の「顔」や「目(眼)」で殺害を決意する。

図13のサブグラフ③に「次郎」は「沙金」の野生と異常な美しさが一つになった「顔」に惹かれ、「沙金」の「目」の力で意思が麻痺し「太郎」殺しを承諾する。図8のサブグラフ⑦に、多襄丸は真砂の「顔」を「見」て眼を合わせ、男(武弘)を殺さない限り、ここを立ち去るまいと覚悟する。

(2) 心変わりする女—『藪の中』の真砂と『偷盗』の沙金の共通点—

(ア) 2人の男の内、1人の男としか共起しない。

図9のサブグラフ⑦に真砂、図13のサブグラフ⑦に沙金の共起関係が表れている。

(イ) 2人の男の内、最初の男を殺そうとする。

図10のサブグラフ⑥に、真砂の「あの『人』(武弘)を『殺』して下さい。」の夫殺しの発言が示される。図13のサブグラフ②に、「太郎さんを殺していいんなら、『仲間』なんぞ何人『殺』したって、いいでしょう。」という発言内容が示される。

(ウ) 顔が魅力的である。

図8のサブグラフ⑦に、真砂の「顔」—「見える」、図13のサブグラフ③に「沙金」—「顔」が示されている。

(エ) 「わたし」を使い悲劇性をアピールする。

図9のサブグラフ⑦に真砂の一人称「わたし」、図13のサブグラフ⑦に沙金の一人称「わたし」が表れている。真砂は夫を殺し、手ごめに遭った自身について語る時、「一体わたしは、——わたしは——」と啜り泣き、沙金は太郎殺しの提案を拒否されそうになった時、「わたしは——わたしは、仲間に——太郎さんに殺されてしまうじゃないの。」と次郎に対して涙を落とす。

(3) 女を奪われる男—『藪の中』の武弘と『偷盗』の太郎の共通点—

(ア) 自分以外の2人を結び付け嫉妬する。

図10のサブグラフ⑤に武弘、図12のサブグラフ⑤に太郎の共起関係が示される。

(イ) 三角関係を一人称の「おれ」で語る。

図12のサブグラフ⑤に太郎の場合が示されるが、武弘の「おれ」は共起する語がない為、最も多い頻出語であるにも関わらず共起ネットワークに表れない。

(ウ) 発言をしない。

図9のサブグラフ④で、真砂が「『勿論』『口』には笹の『落葉』が、一ぱいにつまっていますから、声は『少し』も聞こえません。」と武弘の様子を語っている。図10のサブグラフ⑨に、「長」き「沈黙」をする武弘

の様子を示される。太郎については、『偷盗』第6章で、太郎は黙って星を見ていたが、沙金に馬盗みを頼まれ唇を歪めながら顔く描写がある。

(エ)「目(眼)」で感情を表現する。

図9のサブグラフ②, ⑤に武弘の「眼」による感情表現が示される。図12のサブグラフ③, ⑥に、「太郎」が「片目」を地に伏せて、周りに「目」もくれず歩く様子が示されている。

以上をまとめると、三角関係において奪う男(多襄丸、次郎)は中立的立場で男と女を見ており、女に対しては同じ貞操観念を持ち、最終的に女を拒絶する。心変わりする女(真砂、沙金)は男を魅了する顔を持ち、2番目の男を選び、この男に最初の男を殺す計画を持ち掛ける。両作品の主人公である奪われる男(武弘、太郎)は無口で目(眼)に特徴があり、一人称は「おれ」である。このように、『偷盗』から『藪の中』へのスピノフは主人公の人物設定だけでなく、主要3人および三角関係の設定であると言える。

3. 『羅生門』から『偷盗』へ、『偷盗』から『藪の中』へ

前節までで『偷盗』から『藪の中』へのスピノフが確認されたが、最後に本節では『羅生門』『偷盗』『藪の中』と続く王朝物の執筆に取り組んだ芥川の心の内を推察し、それら作品の関係について考察する。

『羅生門』と『偷盗』の関係については、筆者ら(2023年)は、計量テキスト分析による研究の結果、『偷盗』が『羅生門』の続編的作品であることを示している。『偷盗』の主人公(太郎)は正義感があり、自分を変える象徴語「畜生」によって沙金を殺害し、弟の次郎を野犬から救い出して三角関係を解消する。そして、盗人集団から脱却して、後に名高い男となる。しかし、このように主人公の成長過程を描いている『偷盗』には、『羅生門』のような極限状況下での選択に表れる人間の本質が描かれていない。それが、芥川が『偷盗』を失敗作とみなし、スピノフ作

品『藪の中』の執筆に踏み切った理由であると筆者らは考える。

『藪の中』の中に見られる人間の本質は、図6と図11に表れている「返事」に代表されている。多襄丸の「妻にならないか。」という言葉に「ではどこへでもつれて行って下さい。」と真砂は「返事」をする。藪の外へ出ていく前に真砂は多襄丸に「あの人を殺して下さい。」と叫ぶ。多襄丸は「返事」をせずに真砂を蹴倒し、武弘に「殺すか、それとも助けてやるか?『返事』はただ頷けば良い。殺すか?」と問う。ためらう武弘に真砂は一声呼び走り出す。妻の心変わりとは夫への殺意、盗人の妻への拒否と夫への判断の委ね、夫の妻を殺すことへの葛藤と妻の逃亡、追い詰められた夫婦の咄嗟の反応が「返事」に表されている。

盗みと極限状況下での選択の組み合わせの原点には『羅生門』がある。『羅生門』『偷盗』『藪の中』は全て『今昔物語集』を原作としている王朝物であり、「盗人」が登場している。芥川の『偷盗』の失敗意識が、『羅生門』の極限状況下での選択に表れる人間の本質を、『偷盗』のスキーマによる証言の自己劇化、人物設定、男女の三角関係のもつれをスピノフさせることにより、『藪の中』に回帰させたと考えられる。

V. 結語

本研究では、計量テキスト分析を用いて『藪の中』と『偷盗』の関係を明らかにすることを第一の研究目的とし、それに関連して、事件の真相と主題に関して大岡説を支持する形で、両作品の主要3人の関係を比較することを第二の研究目的とした。頻出語に関する対応分析と共起ネットワーク分析の結果、『藪の中』は、『偷盗』のスキーマによる証言の自己劇化、人物設定、男女の三角関係のもつれがスピノフした作品であることが分かった。また、分析結果に基づいて両作品の主要3人を比較したところ、多くの一致が見られ、スピノフを裏付ける証拠となった。

謝辞

本研究を行うにあたり、静岡産業大学の先生方にはいろいろとお世話になりました。また、著者の1人である青木ゆかりは、清泉女子大学大学院在学中に、当時同大学・大学院教授であった故剣持武彦先生、そして、当時フェリス女学院大学・大学院教授の宮坂覺先生に大変お世話になりました。この場をお借りして皆様に御礼を申し上げますと共に、故剣持武彦先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

参考文献

- 青木優、青木ゆかり『『羅生門』と『偷盜』の計量テキスト分析』静岡産業大学論集『環境と経営』第29巻2号,2023年,pp.1-23.
- 芥川龍之介『藪の中』,「青空文庫」<https://www.aozora.gr.jp/cards/000879/card179.html> (2023年9月7日アクセス)
- 芥川龍之介『偷盜』,「青空文庫」<https://www.aozora.gr.jp/cards/000879/card31.html> (2023年9月7日アクセス)
- 石塚章夫「学会設立20周年記念学会企画シンポジウム 供述の心理学的評価 法曹実務家からみた供述の心理学的評価」『法と心理』第20巻第1号,2020年,pp.32-34.
- 大岡昇平「芥川龍之介を弁護する—事実と小説の間(中村・福田『藪の中』論争)」『中央公論』85(13)中央公論新社,1970年,pp.50-61.
- 柄谷行人「芥川龍之介における現代—『藪の中』をめぐって」『國文學：解釈と教材の研究』學燈社[編],1972年,pp.136-141.
- 蔡佩青、魏世杰、彭春陽「真相は「藪の中」—テキスト含意認識モデルを用いた証言関連分析—」第17回国際芥川龍之介学会(ISAS),2020年.
- 福田金光「『藪の中』の研究：真相と主題」『名古屋女子大学紀要』第24巻,1978年,pp.237-248.
- 福田恒存「公開日誌-4『藪の中について』」『文學界』文藝春秋24 1970年,pp.172-179.
- 中村光夫「『藪の中』から」『すばる』集英社創刊号 1970年,pp.204-209.

- 山本亮介「長い小説の作り方—芥川龍之介「偷盜」論—」『文学論叢』第96巻,2022年,pp.69-88.
- 「心理学用語集サイコタム」<https://psychoterm.jp/> (2023年7月29日アクセス)